

下

846-9 (印)

俳諧資料カード

年代 弘化三

編者 (筆者) 竹内玄玄一

書名

備考 天保三年刊
の復刷

(下垣内蔵)

水きりも 徳あけ切けり

りころ牛

中

荒木麻一節

凡士

續徳家奇人談卷下

白井鳥醉

故為當 竹内玄玄一 遺編



下垣内和人

白井表在愚の上総由地生郡地引邑此人を口小並びる此豪
家あれども人此はく先少よりて金山より巨萬の杖と費
わいなる事ゆに思ふ物うも性業中よりく此督とゆづり世は徳
社小遁る柳居を河うく名と名録といひ牧羊と号は松家
菴二世の宗匠と「先でく所不病むおひりり種中し」ゆふくち
小思ひ切くる野中より「玉柳やふ髪を捨ふ落の」一ツ家は灯
を中りりく時を裁あるく「徳子れ、そが死中ふ三日は切
りりく謙念へ振ゆるとくくの人小庵をらせ世世行りるが十日は
種るといひども着つれあく一人のさうり人を中へ使しゆめ

賣非定行

改竄画
田中

くさくさおも
千あさる
るや言のど

大物居

ちんちん
色味

長門川

月乃

月乃



志むる小糸川の娼家なる在馬と名のれる坊主客れ六七日
居續けはとさうたふおけりて呼出—急利ありとあそむるを
たぐひあひしき啼危はさそつ又古明鳥鳴打よりいふおの
智をせられ日比の礼儀は似合はとせ先問うた我りと
控雲にゆける八幡ひことどもお訳をさる時公にいふあり
無き乗ドく居つてけしきり控る無尽くる折るさ出は
るを幸ひ降り来れりて平控くて答へるもをり

山口東路

山口宗祇江戸の人馬海人といひ次第磨屋と号ひたり陋巷
小居一瓢をりて置れりとい古後を備へる云く禍莫大於不
知足福莫大於知足と若くはしより業ありとめど一流の宗祇
ありこいふ又双六の妙手よりくるたに人はむうひて双六の勝負あり

賣非定舟人炎

いづれのもよりのせはもそくはげんと打扇にかかりは侍んと
おべうらびととくくえきあこといふべし戒ゆる播立れあ
た緑町ある危の何ら小「我いたる琴の心と其の心はこれ
と其琴と弾く楽とせしど又其藝ある徳徳の伯父素堂
子にすまひびびく風流の脱せし時「後史はあまきく
後のおをうかご吟せしむあられくは老八十二歳にしく昔は
去るふつ人掃戸が逆掉集れ申ふと一室曆の季夏晦日乃
疾未兆を拈びて「改め二人合れて交さしみる」「りては
弟も茄子ゆけゆく時一も今むいと後よりかご記
ししく又生あ友とられ向ぶりとあけさう「教入や積るもの
とねえん種釈の吟「柿は六ツ藝をりあり十三夜流徳「耳
搔にき掻があらる花卵亦白雲「山守の慢改よてる異なる

種琳「寄まれ疾はあし油て時を百里「松島や揚名の人
風うらむ敬雨「ゆはられて松の音きくあつさ氷花「寄れ
春の大ききとより梅の花祇徳「梅咲や之所あると心し物
沾洲「花に杖はく果し身も挽む身を素来「月雲も跡
での事よ花ざうり紀述「麻れねのともぬりのハキとわは
乙由「たづこを引出むとれ月又うる宗瑞「虫干や葉ふ時長
小多り合る光「狼の地大狗むくをとり世境有「けいとうや
日ハ焼けを捨くゆく柳居「何虫の面影あまひ枯せうか
米仲「大和路の境をちりけや花ざうり流く「新月や海鏡
ちかると「帯琴風「壁はく不換も度し「花系系書機
吐くううと疾とる旅たり虫のよ名治涼「甚を場も月の敷く
元ハくと貞佐「態坂が長刀わがるや夜うる光氣「紙籠成

男が立ちくちせり 詠波「かひけり 猶も八十八夜を」 春念の
茂若菜の 裏の花世うまは 二句作あやえ 沈むく 河の云いどし
ていとう かけられしと記したる 時子やうてれ 名家多うるも
ゆき 登あるうり

紫子春来

紫子春来 江戸の人 六盤仙と号し 正月が来ころ 畑は下結
の 田家元日 足るが おと 名月や 花なき 重く 夕比 直尼
あれ 古今 来うしと 直見 是ると けあより 出て 秋の 正花 じ
なり ころぞ 働き する 自らの 今花の 一字と 之を ころころ みて
獲りに 正意と 是る いと 興なり とも 格別 の 名茶 あり じや
米仲り 記す 春来は 小登 眠女の 侍 掛物 して 足け
るが 或時 賛し 我意 八秋 如や 達磨 と 仲人 とも 其の うり 記

お登下し ちかみ 又ひと 日我 庵に 来て 是れ 見よと せし ころ 初出
に 巻く 田舎 小娘 ころ 山風 を げし 教 地火 と ちう ころ 伏
ころ がつ の 留め 小神 小太の えつ き ぬ 髪 ころ ちん 旅 や し せ
記よ ころ ちきり 小ひ ぬる が 不圖 けし 見ころ 小 拘つ くれ あり
ころ せし けし ころ けし ころ 水 かな 兎 角 ころ ちん せき けし
ころ 公 あり ひと ころ 身 ひとつ の 煙 ちん けし ころ ころ あり へし
よん ちん ころ けし ころ 其 酒 落 ち ころ へし

慶紀述

慶紀述 江戸の人 道と 祇堂 ころ 侍と 梅小 四時
菴の 号あり 隆佛 小 魚も 出ころ 二紫 ころ 洛の 宗 庭 古 掃の
賀に けし 上 八 足 とも 易し 石子 ころ 時は 名 垣 ころ 茶 け 飾 ち
ころ 焚 燗 の 画 小 賛 あり ころ 炭 は 水 ころ けし ころ けし ころ

棠之間が年々歳々花相似歳々年々人不同との詞句成感
 下々（たんにえき）槐社（へんえき）の愛易（あいえき）を思ひ終りきつうく（し）秋（あき）を悔（くわい）す（る）菜（さい）
 花集（はなしゆ）或玉河（あまぎ）編（編）と書しと人の笑ひと求む後（のち）不存（ふぞん）我實（われじつ）所（ところ）
 考（かう）り（と）是とかりひ終（はつ）ぐ今江戸（いまえど）槐社（へんえき）と稱（なづ）するハあの人と欲（ほ）
 其控（しん）壘（るい）こひければ一時流行（いちじつりゆう）く我（われ）と云（い）ふの遂（すい）はハ又（また）もも
 つく契（せき）し終（はつ）るに盈（えい）れを虧（く）すれ易（やす）程（ほど）を乞（ねが）えくるもやまどし
 きるよあゆりたる程（ほど）を乞（ねが）えたりしとわや時（とき）は秘書監（ひしょく）鳳谷（ほうた）先生（せんせい）
 その風流（ふうりゆう）と稱（なづ）するの約（やく）あり稜（れい）々（々）逸氣好風流（いつきこうふうりゆう）閑座清吟（かんざせいぎん）能（た）
 解憂水雲月嶺幽栖意四時常作菴中遊（かいゆうすいぐんげつりゅうしゆういしじやうさくちうすう）とまこ（ま）名譽（なご）あるすや

俳宗祇漉

祇漉（ぎしゆ）ハ江戸の人祇空（ぎくう）にまゐびて自（まづ）生（ま）菴（あん）と号（ごう）以（も）考（かう）る（に）祇社（ぎしゃ）不（ふ）癖（へき）
 しく日（ひ）寮（りよう）むとすしくしく（し）死（し）さう（ら）かむ（ら）あ（ら）ー（ら）花（はな）の山（やま）

「夜（よ）更（も）その日（ひ）れ共（も）はまう（ら）ハ（ハ）一（ひと）時（じ）晷（び）（は）かぢう（う）と（と）醫（い）
（れ）療（りょう）とあふさ（）こに醫（い）とあ（ら）の（ら）めて一（ひと）月（げつ）面（めん）のりく（く）一（ひと）禿（く）然（ぜん）を（を）
 うか一年（いちねん）分（ぶん）不（ふ）考（かう）る（に）わ（ら）く「思（おも）ひ（は）る（に）お（も）や（ら）れ（）か（）の（）家（や）
 淡（たん）筆（びつ）のわ（ら）く（と）ある史（し）詩（し）在（あ）れ（）が（）息（いき）のあ（ら）り（）ハ（ハ）山（やま）里（り）に遊（あそ）
 女（に）ま（ま）身（み）と殺（ころ）す（に）其（その）居（ゐ）れ（）け（）不（ふ）蹄（てい）定（てい）の於（お）れ（）祇（ぎ）考（かう）ひ（ら）る（に）さ（ら）び（）
 ひ（）ひ（）と（）憂（うれ）ひ（）と（）あ（ら）へ（）も（）ま（）の（）と（）あ（ら）一（ひと）就（し）この（）ひ（）と（）ゆ（ゆ）不（ふ）想（きやう）す（）
 鶯（う）く（）あ（ら）と（）書（か）く（）祇（ぎ）漉（し）使（し）ち（）と（）む（む）ひ（）の（）老（らう）と（）出（し）世（せ）とあ（ら）と（）清（せい）す（）
 一句（いちご）と（）さ（）り「菊（きく）や（）あ（ら）る（）未（み）先（せん）を（を）あ（ら）げ（）れ（）梅（う）め（）あ（ら）れ（）史（し）詩（し）を（を）
 の息（いき）佛（ぶつ）名（な）る（）古（こ）兵（へい）庫（こ）在（あ）れ（）紅（こう）梅（ばい）を（を）れ（）之（の）彼（か）も（）若（わ）者（じや）あ（ら）れ（）一句（いちご）
 んと翻（か）へ（）「右（みぎ）京（きやう）か（）ひ（）わ（）と（）ける（に）と（）ぞ又（また）打（うち）莊（じやう）と（）突（つ）鏡（きやう）を（を）と（）若（わ）
 或日（あるひ）合（あ）歡（くわん）老人（らうじん）嬉（き）（し）乃（な）あ（ら）と（）「こ（）と（）わ（）か（）げ（）ひ（）と（）さ（）を（を）乃（な）知（ち）
 本（ほん）地（ち）と（）治（ち）洲（しゅう）を（を）雲（う）風（ふう）紫（むら）雲（う）乃（な）左（さ）乃（な）無（む）の（）り（）と（）ハ（ハ）祇（ぎ）漉（し）考（かう）る（に）

つ子ふつとく百季の向今時の調よりのぞ今れ調何ぞ百
年の後不命じやと是時世の交革と知れりとのべし

西橋妻

為橋の江戸濱第幾の尺任は人ありと夫婦とも能事とし
免り或夜いづく言ふじふ西橋のよりのこの能事小調市と
伏しと出ゆえと以妻あつて出あつて「我子あつて依りあ
るは夜の言と臥床に西橋そのをよんぞおのれ一人内は
とて是か能くする言ふとわれ冠里公の「言れ日やおれも人乃
子橋のひと候伯とくく世知めりも亦事ありはや

皋月平砂

皋月平砂の江戸の人貞佐がつ子と其以の物藏ありと人その
乃乃荆棘とくふあふとびとりのあり頼る和漢の古平砂

わい或と此句のお出小清國の先帝對聯れ文小日月燈江
海油風雷鼓板天地第一番戲場堯舜且文武末莽操中浄古今
来許多脚色といふ大紀号とわれ八日平天竺の評判海東あくと
をよとく「月雪や隣の庭は秋迦如來傳と左傳か之
権がひとわりのひと「かくれと母よりよる秋をか史記陳傳
が傳説傳と「子金の恵をふちるや花れ友その作採小裁
るもるを伝あをふ「著い水の而耐集世はつる續而耐
集いよと刻をい今の平砂が都ふ傳ふ

中村敷石

武州埼玉郡吾妻村の里正中村を名馬の駿河の兵司式部少輔
友系一氏八世の孫と少うとよる風流の道不知氏其がしむ
け下免連袂と好く時亨其河をふ交り後傳能千如く

宝曆六年丙子年五月蘭盆

盆供

右様く... 盆供の儀は... 盆の日に... 盆の日に... 盆の日に...

迎火

の道禁するや... 庭男 平砂

炭

墨の... 盆の...

九三六旬

盆の日の... 盆の日の... 盆の日の...

盆の日の... 盆の日の...

霊棚乃蓮... 盆の...

燈明... 盆の...

供物... 盆の...

挽茶... 盆の...

牛... 盆の...

汲水... 盆の...

焼香... 盆の...

香... 盆の...

會供十三有六句

盆の日の... 盆の日の... 盆の日の...

葛之葉乃裏

毛問波

也箱位牌

馬... 盆の...

飯... 盆の...

供物... 盆の...

插華... 盆の...

也... 盆の...

比... 盆の...

南... 盆の...

祭... 盆の...

系... 盆の...

香... 盆の...

經... 盆の...

市を... 盆の... 盆の... 盆の...

燈籠

盆の... 盆の...

部類眷屬

無縁方更

送火

盆の日の... 盆の日の... 盆の日の... 盆の日の...

橋川百菴と交り雅志を教ふといひ庵と菊園中より
「山笑ひ谷まこころを重輝る」右の肩とあつたに表のも
ろちや誠谷吾山とてつゝいおと不持来りては人の校警成
乞こひひとせは戸あゆるの中一河竹庵とては才智山上
有る徳とて父兄の道に人ほひひとていづく世人者物と
りてし来りて先生とてやまふあのみ史しきるのひあは
いうてあひてあひとてむ吾山論とて人者物とてりて
来るは物まあんぐとてこれ我智の名を補ふ想人あり
教はげんはつるべうとて人の口とて言とてまてまのつはは
或問金花石葉集桃借原道とていづく世はつれされは初
若き一やしひつか天の八年七月物なは辞世一英子か松
や歳とてつる塚

誠谷吾山

法橋吾山は或の誠谷の人ありしより江戸に來り柳居より
たよりとて徳子とて向ふ河死てより心より在調ふはれあは
て蕉風の韻とてえり号とて河舟とてさるも竹の虫あるとてめり
あつても其人がとてむり志とて一年に兼旦とて一由る日れ續乃
ありもや物つひみ向梅とて優は夫とていはは文選不天地
萬代之逆旅日月萬代之過客とてさるもなれは菊斗公より
飲中八仙のちくとて乞た中へるは海下よる也とて智章と「蘇
のわつりさ中ひや若清も汝陽王とて一日れ乃や延もあは車
うし左相と「千金の氷室やせ先て舌れ味宗之と「冷天を我
物ぐわのほちひうる蘇晋成」如名拂子羅もはりては較もさ
ひ李白と「つるつに舟とてまてて海とて麻張旭と「夕立や管

と少くもいし雲れを焦遂成「市中乃人とまをりや憚の姿
始先仍掛し〜英流の國福傳の舞とあゆむに何なるかの
そとちりぬ人のあぬお徳神海あつるよ〜答ふさうらぶ一徳紙
証し〜通るべし〜と折う〜時々のあはば一我とををゆる
さぬ舞やわらぎし晩多徳神未業と著〜蕉翁の知と解
し〜先輩の未教とありし又法方云物新林呼わはあらふ等
ハ昔人れりてわらぶ可く巻紙繕はる吟「花とらん〜雪ハきよのみ
そよ風のあ

五行坊

五行坊琴た尾羽の人徳玄と應元坊より傳りし流風より〜
一時お傳る歸を仙と号し一回大木の竹お葉なり〜鏡月一作向〜
か別ハあり〜夕月の月或時彼お珍子なり我ハ携手なり被る

竹
たのしの

枇杷

るま

やあやひ



河
筆
同

るま
あやひ

百所を八作し紙紙深き
よるあしし凍満しと句より
其深しと句にて百句を句あり
あり物一十句を句新し
色く多ありて細紙
信の可きとら平紙

紙手と我ふゆり我が務手と彼ふあつけ八世八只と
亦しびくもゆくと端去し一材喰ひふ来ふか
是れより一年何変りやある河の傍の幼紙と書きたる
とも志と愛せし書きたるのまきえありともなる河の
来と許さるとのふそふ人何じより附合の子鹿元
返去り附方八体のかひむき細紙とて細紙とのま
そ福のその句ふむふ時の味もてむと百句は廿句
有る附たるなき物八十句の合紙とてそ河の細紙
名りて細紙とてかきゆたる對話の時ありて六
句一かきゆたるそ

玄武坊

村上氏の遺業として江戸約四巻山下小浜紙の
賣非定存入

玄衣坊といふ是統の庵元坊より統庵朴翁の流り村翁より
 傳へしは坊あり「あちが来り後れは初く氷うな」門へ出
 我翁とそる凍とうな「日よけあひるのとむさう」雪の降
 淋し「この雪くまゆるや虫の夢」身とせして小使不出るを
 うねとのれ死せしと人の風すはるを「死を移す所うとんこ
 一花の曇埃ぐる死を身をまう」来たる人ともめて「そが
 よりも死を氷れも打うなつ子の刺髪するに老いそを髪
 之子の愁も有り暮夜之雪の意はもあ」は只身が雪が刺
 あちらうふと前せし「缺盆骨はてくくやむか雪の
 中その凋寂抗しし味ゆも流の一流と構しし道成ま
 流建つたりはれが世の變化流行るんよりハ弟古不易の佛
 心は松ん如くしそ「死をくらの識はひび」松の色わはし

庵の又竹坊より又玄衣坊来り雪をなればけりしとそりき、庵元
 叟の既し一殺せりときくわを泪を流あはし今ハ紀念となる
 三類の一袖ふむひて「百合のそを我もうけむくおハハ」
 つ人何ぐ「富有りしとたお佛社の資助と成し人成り死
 産業の為なればとく釈れ意ふらふ叟の有るを凍く叟
 佛社の郡信といふも本忠孝のやけりをかくりありはる成
 釈の意ふらふハ我なれおハハとつ人きくは道は詮方なく
 昨年の海切より又ある法度佛社のあはれおハハおハハ
 つ人おハハしつ人傳録をまをくと興んりしを存せしつ人脱
 ておハハのたつ人後き我り「録おハハをそ藩士とある時ハ
 何よりと命せしとそもいあそとつ人脱んや佛社のつ人脱てを
 や今流の一流と後せおハハの身と保りしとそを後きんハ

志づくとそりげせしりしも尚時ふおひくの大導ゆうを嘆
まぬりのもあひり

龍門曉卷

曉卷ハ尾州公の藩士之江戸の佛社と英法の佛某あま
びもや蕉風の藝と感泣し一風と記し物うう花の本の
号と物せんと思ひ立し一箇の得くこありて君の勅好と歌り
浪人したり種多くは先あうく日たり此住居と許しるまより
名古屋の町小移りく番雨巷と号し一周舉とも認つとも
祿せると一振袖の大和ハたり一日の初め「徳也れて有るけり
の四月ハ」本の家末の末や花本董「曉や祿の初めり
の海老小番人とひるはつ戸と換しく甲方此清地小松小寶
曆中よりあふ極し松島と一懸して「隆興殿の源巻し

千松島しせしが其知いまさ佳境小くはしとそ化の秘家
に合るも此和中華さびりく「松島や果はうりく夕あうり
と伝公あり一縁小初め福ししんくも爰に感泣し一うと免
何れのとくや熱く世なりく「お迷殿中お召れ参殿付くあま
さし「あま傳ふ星の夜紙し「たう子もその名中うやくと紙
おきく不自ら世をさしる教句「若折小し路の公をあられ
「巻と長ふあうりや巻の若世を「願紙のたうしれる神印

谷口蕪村

谷口蕪村ハ別姓與謝名ハ長庚字ハ春星三果東誠と号以常
に和洋の古小耽く稗史小説まをも海らひとらふ夏あしそ人
と歌り蕪落うく物小物らひ時り「女学は藝とりて公貴小
定るととも礼法と正しひりとならふ己が産業ハ漁稱を夏

水居不家居以妻子或や一たふ不穢を所時、如く細
 うら砂とらし、懐ひ去く、於の市にむく、帰路酒を賣ひし、
 みく、海冷ひし、ふ、「三枕の難黄か、ゆるや長者振風姿卓然
 「表の海むねのひのたうく、ゆる悠々無涯」花は、ぬく、帰ら
 烈し、名拙子洒落自在「雑相とあれ」と樹下に、赤らるる生
 清涼」を何れ、飛が留士の、活世の小家より、譬喻無比「つら
 考あくと、漱おきじ、待はや、取西上人更得其趣「練賣市小
 刀とあらし、く、一奉守や、乾煙れを刀、轄の、持共意氣揚、偏和
 其成、人自然に好む、雨の滑、稽その、馬化とえ、くる、千載の下り、を其
 人あり、この、ふべ、又画者、以謝寅と、ふ、初め漢画より、今、後、不、風
 と、紀、以、世、の、人、の、知、る、而、其、の、仍、ひ、と、ま、不、尚、時、大、雅、堂、と、伯、仲、以、
 や、平、安、の、淇、園、先、生、類、謝、蕪、村、江、村、之、圖、の、仍、り、う、く、ま、
 此ら、是、より、公、あ、る、者、に、求、め、ん、く、その、人、の、生、来、を、知、べ、

蘭更居士

蘭更居士、醫と業と、一、京、初、不、以、火、り、を、と、加、賀、れ、希、固、
 浦、あ、び、て、折、か、く、仇、席、と、も、立、け、る、時、不、尚、く、蕪、村、曉、愛、を、
 と、れ、名、家、に、け、お、され、む、く、年、月、と、あ、く、る、或、と、加、賀、の、何、
 某、き、く、う、て、今、暮、曉、の、高、旅、以、て、不、殺、く、近、不、不、仇、社、の、株、株、
 不、汝、居、然、と、く、時、の、い、れ、る、を、知、し、け、や、と、有、り、不、業、飛、成、
 庭、中、不、投、也、く、一、り、案、史、大、に、不、事、と、て、何、成、候、り、お、く、む、け、る、
 より、於、都、不、隠、れ、る、此、家、海、と、不、殺、く、し、一、い、な、け、や、櫻、り、れ、中、不、
 梅、の、花、一、日、の、数、と、お、し、く、移、し、る、堂、扇、が、梅、何、の、目、お、く、
 と、れ、く、流、流、く、く、む、と、せ、東、五、行、脚、の、途、中、佐、徳、の、ほ、ま、の、旗、を、
 残、在、何、来、が、後、が、許、不、旅、宿、れ、折、く、う、あ、る、と、不、お、む、て、お、修、く、一、古、

去画と見らる中不意箱自筆の契此物... 諸國
の門人多う中不意の少枝が向ふ此物... 居ぬる事
不意の筆... 小枝が向ふと云哉せざる聖物と云
あるとの見附く大いふおとろきまよりむ先重くみるに人
んせはるもさし

渡邊岱者

渡邊源右衛門尾陽の藩士... 代々幾許の孫... 常不礼葬と好む装束... 賢不居く晏如する... 曉登り門不入く... 一様ちりり... 一軍味考... 本枯のさる地不鳴く... 一已が庭中の土成... 泥去とをさび... 子連にむく今日の... 客人の興不... 一系物とせむ... 一り物傳く... 一丸も... 興んす... 井上士朗

井上士朗

井上考庵徳石士朗尾州名古... 物不拘... されども... 勢ひと... 一己が庭中の土成... 泥去とをさび... 子連にむく今日の... 客人の興不... 一系物とせむ... 一り物傳く... 一丸も... 興んす

時るきの其様と申しあはるるありしや人の及ばざるありし
 心とせ水の不庭不常れ来りしとて庭掃のよとの若るお
 「美考成のよひを梅不垣ありし伊勢の奉居宮出の香乃
 深井がうとめで文士の性来とせしゆも成とれ沐生に來り
 抄びくそは侍こりりふゆるるを「松坂のまのころを若乃こ
 まりあれはる平家うらうらと樂とせしあや「琵琶とて
 志づくを月のおき大和のよの御守り以敵火山いつま耳梨
 じあといれそとあひのゆりく流のあるるに獲まれさるるを海子
 くのうらくおまうらゆむのうらくゆえんとしや「あすどすこがむる
 色もあられが「世人も耳なりしは「落葉捨花月一雙の抄び
 おうあれ日も院りしとれてまもはや「瓢の酒の残りびくおま

ぬるれどあせしと「瓢箪を懐かしくまされね平生勤以
 けりうらう人なり自贊の句「南無月夜有を香時而新中し何世
 の幸とや病にゆき「是る事を初述や田原の院住居られ
 終極とぬらうら初先感者が同僚と傳し「紅葉乃宴成
 りようゆいと穿たざらふゆくとんふ席上と庭中かすはくあはれ
 系とらして只不錦を名けるがあうらあると「容不むいし句
 ちんぐらう事あかれし朝法と入る答くそ「一字と数句
 出たらやぬりうらう人蕉雨ふ八葉の号と傳る文小霞の松不葉ひ
 雪の梅は葉ふとらふし「月の香小君の夜不葉ふ日も若く風雅
 と傳しあふ時とて「漣や時の浮葉によせくる花のみあこの葉の
 紅葉とて狂句に葉守と並ゆらぬまゝその云葉傳と無きなり

川上不宿

賣非定手入

卷之十一

十一

それハ所一編ハ天下此也云々と云りあれハ百花小探林の寂滅
見つてをうと何とて「物とて」物とてはくや菊の香此は茶味
透世生の物干家の業と幾子業りと此中には下と「秀海や
雪の物の色とあゆむるを流泊するは物とてはくやの極あり

寺町百菴

寺町と云ハ江戸人新柳宮と號シ百菴とも云リ「心平庵
を山ありぬれもわし」小南の物産交窓に梅「十六夜に水
月を十三夜白氏文集日聽我歌西道富家女易嫁嫁早輕其夫
貧家女難嫁嫁晚孝於姑と証を引く「お徳おうらぐくたや雪女
祖棟先生 大樹公は目見の所紹かしく「雪中のぬるなを如
つひ歎その極屈不伸とてとてはくや一家の風姿の杜茶官
途ありとてはくや物産交窓と交りたてはくやと嗜め了實保

元年の冬何のりやあやとち此年とて持役一聖と云と
時此身と云と十の年を道徳の志けりるゆゑと「林教
後よ自記する室曆六事買困の身と云とて「後
る少夜うら此身の時きくく人小徳うれしとて或ハ曆子と満
とも程石をり全体若紙うゆるの癖ありとて實類の山伏并
はりるとも石僧の持持不隣とてを物おとて云とて「州
と搦たる時君子業心と云とて「何れと結ぶなりとて
乳山人とてはくやとて「郭公やとて竹門小居を移せり
か「むけむけむけむけの竹の門あり或時ハ法橋吾山
が室町の庵おゆ金此花女を引連く共小食容とてはくや
取の室とてはくやとて「後ハ一寺は教夜の宅とてはくや
あり百菴の異を云とて「雪とてはくやとて「雪とてはくや

一和華油は後の行身ともんる

馬場存我

馬場存我ハ甲州武田家の重臣英法忠臣の末孫也一が叔父
 ありて三浦が叔父に仕てりしかのれ致仕して味聲に跡をゆね遂に
 隠遁の身と成る時、年早菴室春末小陸撰とて菴室とのい
 しも所の菴室と改名せりしより其のれも存我と名れり初め乃
 号李井菴より古來菴と号する事ありしもの事らのこ古來れ
 号を讓りてあげりしより有る危と云ふべり「鳥帽子を尻懸
 けくや小松曳」紫づれの六日の月や梅のち一けと結と知
 て庭をく男うる「曰布の布みの隠れ家れやえんる何の以
 りや菴場町不恒る時ハ松葉のしと家ゆがくあれはあ
 おくお傘とて候也」これと宗近、夜而して八景の心

一門よりうごり遊しも居年々くらく左内町ハ居候時
 トくる後ハぬる富く老と居りあつりとうやけ免士と
 りし時や儒成南郭先生に学びしを主人の上ふ人
 あつりしを教ぬしと侯客と云ふなりしとせ成徳侯
 召れりしより先師南郭先生の來りしを小遇て亦來
 察學の罪と候りし先師南郭先生と笑ひし汝は我儒成
 老の徳也と入りし汝は汝侯と云ふなりし程子來りし時
 子やろり汝人の顔回子貢ふかいとや汝は汝侯と云ふなりし
 東坡の言を讀みしなり李白王維は杉かよぐり又我師の
 和ふと云ふなり先師南郭先生の來りしを小遇て亦來
 人の言を讀みしや徳也ハ中古守武宗祇不牙しと貞徳芭蕉は
 汝は汝上達の如くを何ぞをともうに讀みし人をして是より

教訓として存義を教ふる事終つて西き出らん史より乃不丹誠候
抽ぐ所の奇境は入つてあむ

春秋菴白雄

白雄は江戸馬喰町の菴菴の場のおぼろ小僧りのと佐州松代の高
より出らん人少く深く姓氏と匿れて偶たつ子問ふ人あるといふと
そと微笑しつて史ふつてあるのみなりしとを初め松露庵烏明の
門小入てそ以後春秋庵肥鳥と改めし鳥明の偶踏の一踏までこが
ふは適ざりしもの一とせ忍ぶ志と翻つて愛小雄伏せし事候
つらなるを悔く松露庵と改めし一家と愛する小冬の日集の事
調と改く史んとそ後と宜め先名を白雄とあつてつむ或は若く推地
とも稱する尤も勲卓号とせし白孔菊の附録おそ次のを折つて
愛小雄の稱する内小田記の推地國と或は小兵葉と傳つてつらなる

たつと和するの玄機ありしとせ此傳あはれるとされどもその小許多
英士と出せるが世が知る本を流し人知あつてもつらなる
又菴菴の癖葉と名付する一書ありしとせより蕉門の論は自己の
一見識と出せしつてそ志をいへるも是る物も尤も世書のつら被是難
破おちよる人もあるといふとも先師の獲賜書はつてつらなる
の貞徳の選なる所筆をさへ松平河うへに教百う条の異見と流し
難所筆をあらはせり扱あつて若く飛く清潔なる一巻は天明の
以むつて聖に甘谷とふ人ある雲中庵の門人ありしとせつらなる
好むる人としし白熊坊も折つて止宿しつて風流をたつる事候
親しむつてつらなる事候甘谷字小遠留の日記はつてつらなる
人來つてつらなるの癖葉と名付し人々推してつらなる
目にもおちよるつらなる物もつらなる事候甘谷を名を流してつらなる

考坊ふまゆすべしとてやどて裁ぬ若お命とく仕立上るるなり
 客坊飲びまじさぬぬく打たすくよりかろく後む甘公のふ忠試
 ころ上六脱もまふ徳庵の曠もなるとたりあまひ一を城ふ木 夜の標
 の表秋とあひぬをちりて我とも亦羽置の日と都す人々は常々人
 の厚志とゆひ、我おまもる一衣ふれあれをせしく若くはん
 我んとあひふいふく徳庵の日とあひんやとて都す外はふおまを
 更お脱ぬまひなり甘公も庸人なりあまひをいふおも我あやましく
 まもてま一衣をせらるるをみく油豆まじりてを忘お任せを
 又家毎一婚の行もなると都す標標する子屋之門人二三子ん
 と合をくまを号と助んるとて之園の英令と都すふを後日も通く
 表陽とまふる後日と都すの人のあると標排ふはかこの相より
 うこと落る物もあひくみるお先お都す字こおのあひまひく

一と研とふ坊が白ま一品ありし一秋他ひりりるなり
 懐おせんも果をし一を修重人も過人のおそれるる人のを付ま
 非き此棚まかしくして出ぬくろく一先う先と拵ひ買ひ入る
 帰られぬし重ると忘果くぬれぬしりよるふ再び湯を
 ぬるるやしとて飲ぶ人もむ拵て六を笑へるとをを酒標
 かくの如く寛政三年亥歳九月十二日没多六十三品川海晏寺
 お墓の石を造り冷を捨ふはあふ門のて一園の戸やあひまを彼世
 あまの風実盛衰を拵ぬのりく一うふふふは「志のふまの
 治ふるし」とあ白髪首七雲がを手にて「半の脊お酒ありか
 ぶ花は桃孤あの人臘月二十七の如くをまする我をせりあ
 ちて町くも又あふりもうる商人その風致亦一はあふりの
 こそあひるる

大島蓼太

大島陽喬能名ハ蓼太ト云空麻子居士ト稱シ雪中菴ニ世の家
 沙チテ著ク二世史宅沙の傳燈を翻スヨリ首ハ氣韻を
 云々トヨリ後を著明ハ門人数多ク一校と曳ハ幸に
 齊雅トシテ原の由隠禪沙の麈尾に丹田と煉る事
 務ク遂ハ室曆己卯の冬免許トシテ書を小曰大島雪中破
 却兩重関所謂隻手與音聲也云云又安永ハ未歲陽門人
 蓼太の他著る本の一句を以テ來舶の清人ハ示ハ家譯士ハ
 それと傳スルコト大ハ信ハ非トシテ書一糸と稱るを
 一章小曰

撒密他列耶何兒要披促革尼麼子那次吉 蓼太

蓼太先生者隱君子也都人士以為金馬侍從之流亞矣 中畧

蓋僕亦有所感也因賦一絕寫其意倣輦之誦所不辭也

長夏草堂寂。連宵聽雨眠。何時懸月色。松影落庭前。

乾隆四十年孟夏月望後三日雲間程劍南

又安永丁酉夏蓼太向集を和刻トシテ序の他志有歌子曰東都

蓼太以善俳諧歌聞于世 有是哉昔者晁卿與唐人酬和明

人著日本風土記載和歌數篇然則彼知我有詩有和歌矣蓋

未知有連歌也而况俳諧歌乎知有俳諧歌者乃自蓼太始云

思ふに此も清人の和韻ハあつたりのハ誠ニ風雅のめいやくト云

はるは又南歌子の言の如く俳諧あるハ是より一を彼と唐人

も志するに於テ一家の名譽を此上あるべきや扱すありし

昔の芭蕉庵の詠といふ今ハ何レ侯の邸内ハ歌はこれハ時々の

回字のありと蓼太人といふも在ク際々見るとふか

かつよをいふ家小松く明和八年卯歳回春の代と去るより一二町むり
 りわたりて暮老の菩提所要津津河の北中不古のたがら残
 うの—小堂より祖翁の本像と安置—傍より一子庵と結ひ
 乃芭蕉庵と名ふ又曰津別の内おろのきと宮之蕉翁の像と瘞
 て津河と唱ふ押出要津法窟、性翁佛頂津河且懸杖杖周と
 ありて奉と志のぶは撥たもよありきんをたかを法元孫の世の
 うこむりりゆ今津川の代おのそれるより実より古をを懐かき像と
 孝より道と学ぶおそそ津河の像を置るの役とせよもの、さや奉と
 若の河家のちよりわたり久きや蕉老を生津の編集六十條部奉
 勢ふよりそそをの、者く又せお知る不の回時吟吟あおおた
 二とと拾ふく此の例またならぬの、おそやあるもき花のよ
 のら「進」て八月はかくるやあるや「名月や」もれかあらは

孝の松「やり」火と足進を風よよるの雪自像小松
 て「そま」ひのくまのむらたのふく魚天明七丁末之
 月七日歿年七十要津津河津河の傍小墓系碑銘あり

續伊家言人語卷中 終

賣非天行天 卷之十

三三

Handwritten text in a cursive style, likely a list or record of names and titles, including the date '天保三年' (Tenpo 3).

弘化三丙午年六月發兌

大坂書肆

河内屋喜兵衛
河内屋茂兵衛

江戸書肆

須原屋茂兵衛
岡田屋嘉七衛
山城屋佐兵衛
須原屋伊八衛
丁子屋平兵衛

